哲学研究
第五百二十七号
第四十六巻第九冊

機能分析の方法
——デュルケーム理論の問題——

中久郎

一

デュルケームは、社会学の研究に機能分析の方法の最も系統立った適用を行なった最初の一人であった。彼の方針は、社会学や人類学のほか多くの学問領域にその後時をほぼ同じくして発展をみた機能的アプローチの理論的定式化や方法の確立に大きな影響を与え、そのため彼は機能主義の父ともよばれている。機能主義は、方法論として今では可成り豊かな業績をあげ、理論的諸問題についても、激しい論争のなかで相当の整備をみるにいたった。われわれがデュルケームにみる古典的な分析の方法論的含意は、徹底的に練られつつある最近のそうした高い水準からみると必ずしも洗練されていない箇所があり、大づかみな表現にとどまるところも少なくない。しかし、その著作を慎重に読みかえすとき、われわれは、この研究方針の勘所が殆ど押えられていることを知り驚かされる。それのみか、特にア

メリカで機能的アプローチを旨としてきた多くの人々が発展させないままに残してきた貴重な遺産と思えるものさえ、そこにはあるのである。

そうしたなかで、われわれの手でもっと発展させてよいと思える最も重要ないくつかは、機能分析の論理をイデオロギー的係りあいから中立的な分析的枠組の基礎として役立たせる純粋に科学的な方針と、社会を何よりも生成においてとらえる問題意識である。それらとともに、機能分析に含まれる目的論的発想をいわば逆手にとった規範的認識の見地を、この方法によって表現し、それを経験的認識による機能的アプローチに結びつける方法の可能性と有効性を自らの業績によって証拠だててみせたことも、強調されてよい一つである。デュルケームは、社会的事実について、それが何らかの機能的必要を充たすために不可欠であるとみる「不可欠性の公準」（マートン）に拠った説明を展開したことは恐らくなかったし、またこの分析を単に「社会技術」に役立たせようとはかったこともなかった。この方法に託された希望は、端的にいえば、社会の機能的要求という、機能分析にとって中心的な概念の中味に価値関心をもち込み、それとの対応関係によって説明対象の批判的認識を深め、実践的課題にもこたえようとしたことである。この方針は、例えば社会的事実の平常的と病理的との区別に関する規準の思考のうちに最も顕著に役立てられている。それは社会病理学という、社会学的評価の諸問題を取り扱う研究領域でもっと系統的にとり入れられてよいはずのものであろうと思われる。(1)

デュルケームは、社会学を実証科学として徹底させるためには「社会的なもの」を客観的に把握する研究方針を貫くことが何よりも必要と考え、同対象の存在条件と時間的継起に関する法則の定立をもってこの学の課題であるとした。しかし、思考する主観との関連において真偽がはかられる批判的真理がもたらすであろう知的アナルシー収束の役割を、実証的観察によって得られる科学的真理に期待するコントの考えに賛同しながら、観察する主観から切り離された所与の実証のみに依拠し、それの規準によって行動を規律することから結果されるであろう既成のものへの無

批判的受容に陥いることには警戒の念を同時に強くしていた。彼は、実証的観察によって確立される諸事実を批判的認識の基礎として役立たせ、さらに社会的活動に望ましい方向を与えるという、実践的関心の充足をもって最高の希望とした（*Sociologie et Philosophie*（以下 *Sociol. et Phil.* と略）. 1924, Préface par C. Bouglé, p. vi）。現象として与えられる社会的諸事実をいわば超えた位置に身を置こうとしたことは、現実を批判する規準を客体の側ではなく認識主体の側に措定することにほかならない。

しかし、この場合にもデュルケームの支配的関心は道徳問題に向けられている。社会的事実に関する実証的・客観的な科学への要請も、結局のところ道徳的な合意と連帯を社会のうちに確立するという、実践的関心をみたす不可欠の基礎をそれが提供すると信じたためであった。道徳問題に専念するこのような思想的立場は、新唯心論的哲学を展開したブートルーの影響に可成り拠るものといわれている。自然法則の偶然性を唱えたこの哲学者は、目的論的立場を自然科学の領域に導入し、かつその科学批判を通じて、倫理的な実践を最高とする目的論的形而上学の主張にいたった。

デュルケームは実践への意欲を燃やしながら、まさにそのことのために社会的現実に対する冷静な自然科学的認識の重要性をくりかえし強調する。「理想は、それが実在に根ざしていなければ何ものにも基づいていない」のである（*De la division du travail social* (*Div*), 1893; 4e éd, Préface de la 1re éd., p. xxxix）。事実認識と批判認識の観点の緊張した関係づけに専念した彼は、やはり変革期の社会に生きる代表的な社会学者の一人であったといわなければならない。

道徳の問題をめぐる彼の方法は、本稿のほかの論考で筆者も大きな関心事としてきた。[2] ここでの主題は、機能的アプローチについてのデュルケームの数多い先駆的な遺産を正当に評価することに当てたいと思う。そのためには明示的・黙示的に表現されたものの内容の重要性を、彼の論述の全体にわたって評価するとともに、それらをわれわれの今日の用語でもって可能な限り〝翻訳〟して理解する必要があろうと思われる。それらには同時に、現在までの機能

的アプローチの発展過程や全体的なそれの脈絡のなかに可能な範囲で批判的に位置づける努力が合わせて伴われることが望ましい。

（1）この方法をもって、社会学の科学的認識を社会思想の脈絡に連結させ、さらにそれらを実践的関心をみたす基礎に役立たせようとした論述の箇所は、筆者がすでに「社会連帯論と社会主義」の標題のもとに、内容のいく分細かな検討を行なった（『社会学評論』、二〇―一、一九六九年、五二―七二頁）。

（2）「社会的事実と行為」、『哲学研究』、四二―一二（五〇六）、一九六七年、二五―五七頁。

二

機能分析に用いられる中心的な概念や基礎的命題は、ふつう知られているように生物諸科学からえられたものである。デュルケームの機能的アプローチも――初期に彼がその摂取に専念した生物学的社会学者の場合ほど、その類比は強度でなかったにしろ――やはり、この傾向を免かれるものではなかった。彼は機能（fonction）の言葉に、二つの異なる意味あいのあることを生物学の用語を借りて先ず次のように説明している。「……ある時には、機能は生命的運動の一体系を、その結果を度外視して意味しており、またある時には、それはこれらの運動と有機体の若干の欲求との間に存在する対応関係をあらわしている。こうして消化・呼吸等々の機能について語られるが、また消化は有機体にその消耗を回復すべき液体や固体を合体することを機能とするとか、呼吸は動物の肉体組織内にその生命の維持に必要な気体等々をとりいれることを機能とするとかいわれている」（*Div.* p. 21）[1]。

デュルケームは、経済・政治・宗教などの社会諸現象を社会有機体の「機能」としてとらえ、相互の全体としての「親密な結びつき」に関する総合社会学的認識の必要性と重要性を強調したが、その構想のなかで機能という語は第一の意味に用いられた。それは、活動あるいは社会体の〝いのち〟そのものの表現・はたらきを指している[2]。しかし、

特殊科学としての社会学の観点から社会的分業・儀礼・社会的制裁といった一定の型式化された社会的諸事実に説明が加えられるとき、機能は明らかに第二の意味に限定される。『社会的分業論』のなかで、分析の単位となった主要な項目、つまり社会的分業体系は、それを包含する一つの全体としての社会体の欲求に対する対応（correspondance）の観点からその生起と存続が説明されたのが、そうした適例である。すなわち、「分業の機能は何かを問うことは、それがどのような社会的欲求（besoin social）に対応しているかを探ることである」（*Div.* p. 11）。つまり、それは、それが対応する欲求を探ぐることと同じである。

機能のこの第二の用例は、社会学や文化人類学の分野で今日ふつうに見うけるものである。それはデュルケームの分析で機能の語によって専ら理解されるものであった。彼は、社会学的説明の諸問題を取り扱うために機能という用語を特に選ぶ理由を述べた箇所で、他の類似の用語が意図した分析効果を高めるのに適当でなく、したがって、それらからの区別が不可欠であると説いた。例えば、目的とか目標という語は、ある現象の存在と生起が想定された特定の目的により予め原因が与えられ説明されることとなり、「われわれの決定しようとしている諸結果をめざして存在していることを仮定するがゆえに不適当である。」「結果とか効果という用語は、なおさらわれわれを満足させない。なぜなら、それらは対応の観念を全くよび起こさせないからである」（*Div.* p. 12）。このように、機能とか役割（service）という語が対応の観念をあらわすのに甚だ好都合であるとしたのち、対応の意味を問い、それが分業体系のような分析単位の参与者によって「意図され予期された適応からか、あるいは事後の調節から生じているかどうか」の問いにはかかわりなく、観察者にとりその対応が存在しているかどうかを、またそれが何ものによって成立っているかを知ることが重要であるとみた（*Les règles de la méthode sociologique*（*Règ.*）, 1895; 15e éd., p. 95）。デュルケームの機能分析にあっては、この対応が考察される諸事実ないし諸現象に参与する個人により、主観的に意図され認知されると否とにかかわりなく、観察者の側からの客観的対応を意味していたのである。そこで機能の概念は、観察者の見地を含み

必ずしも当事者の見地を含まない。その認識において、行為者によって主観的に意図される目的・動機・目標・意図と、それらの客観的な社会的結果とは分析的に区別されなければならないカテゴリーである。社会学主義の立場に立ったデュルケームの課題は、観察対象の、必ずしも参与者によって意図されない客観的結果の社会学的説明にあった。もとより、「社会的なもの」に対する客観主義の方法論に依拠しながら、彼自らは主意主義的方法論や行為の目的、手段分析を承知はしていたし、またそれらの欠点も鋭く自覚していたように思われる。彼の論究が、マートンのいう潜在的機能に限られた理由は、社会学の独自の対象とされた社会的事実がもつ「固有の一つの性質」に基因する。けだし社会的事実は、「単にそれを欲求しまた意志することによって存在を与えることができないものである」からである（*Reg.* p. 90）。

今日の機能的アプローチのなかには、機能の概念の多義性によるほか、社会現象の科学的説明の観点からみてもさまざまの種類がある。この方針による実際の業績によってうかがえる、そうしたなかの代表的な一つは、分析対象である項目の生起を社会構成員の欲求や心理的要因によって説明しようとするものである。第二は、項目の存在や生起を、これらを包含する一つの全体としての社会体系の「欲求」との対応関係の観点から説明するものである。この両種は、前者の分析視点が心理学的であるのに対し、後者のそれが社会学的であるという特徴を対照的におびている。社会学的解釈の問題をめぐるこの両者間の論争は、かつてラドクリフ＝ブラウンとマリノフスキーの間で交わされ、最近では「交叉イトコ婚」の問題について、レヴィ＝ストロースとホマンズ・シュナイダーの間で行なわれてきた。(3) この点に関してデュルケームの機能主義は、明らかに社会学的なそれであった。彼は、その社会学に依拠したラドクリフ＝ブラウンの説明方式にその拡張をみたように、機能的「欲求」は、社会的「欲求」を指す用語であって生物学的・心理学的「欲求」ではなかったし、全体としての社会が部分に対してもつ機能についても極く附随的にしか語るところがなかった。これは社会現象を生物学的・心理学的要因によって説明する生物学主義・心理学主義に反対する

方法論的規準の必然的帰結であったといえよう。社会学主義の観点からすれば、個人の欲求や心理学的要因は、結局のところ、「外在的」な社会（集合意識の体系）による「拘束」の結果であり、社会の欲求の個人における再表現にすぎないとみられる。

デュルケームの機能の概念は、社会学分析における目的論的方法の代替物として、またそれの修正として発達させるべき性質のものでもあった。[4] 彼は、人類の進歩を未来に向かい限りなく前進する人間性の可能性の観点から説明する「進歩の観念」や、より大きな幸福を求める欲望によって社会の進化を解釈するスペンサーのような功利主義理論に反駁し、そうした要因の社会学的説明における重要性は承知しながらも、それらの客観的結果としてあらわれる「社会的なもの」によって諸経過を説明する社会学主義の原理を優先させた。

（1） その他、分業による体系が、「特殊な諸機能の一体系」であるとか、諸機能の専門化・不調和とかいわれるときには、“fonction”の語は、役割・役務・職分・働きの意味に用いられ、職能団体のような「アソシエーション」にも論及することとなる。

（2） 結果から切り離し、活動そのものを機能とみる第一の用法は、その後イギリスのホブハウスにみられたが、周知のアソシエーション概念を、「特殊な機能または諸機能を遂行するために結合した人々の集団」（ギンスバーク）と定義するなかに代表されている。新明正道「機能の概念について」、『社会学評論』一〇―一（三七）、一九六〇年、七七―八二頁。

（3） G. C. Homans and D. H. Schneider, *Marriage, Authority and Final Causes*: A Study of Unilateral Cross-cousin Marriage, (reprinted with additional Comments in G. C. Homans, *Sentiments and Activities*: Essays in Social Science, 1962) 青柳真智子訳「交叉イトコ婚と系譜」祖父江孝田訳編『文化人類学リーディングス』一九六五年、三〇―九五頁。なお、デュルケームのいう社会的事実は、社会有機体の欲求との対応関係で説明されるものであるにしても、同対象のなかで特に原初的・可能態としてのそれは、「歴史において相継起してあらわれるすべての人間性」を含んでいるという思想に論拠がおかれていた。Cf. É. Durkheim, L'évolution pédagogique en France, Vol. II, 1938（小関藤一郎訳『フランス教育思想史』下　三〇五頁）

(4) A. Pierce, "Durkheim and Functionalism," in K. H. Wolff ed., *Émile Durkheim*, 1960, pp. 154—7.

三

デュルケームは、分析対象である項目を社会的事実としての特性においてとらえ、それの存在や生起の説明観点を全体としての社会体の何らかの欲求に対応する関係のなかに求める機能分析をもって社会学の一説明方法とした。そのさい分析対象が個々の参与者の欲求に対してもつ機能的結果を考えるアプローチも実質的に重視していたように思われる。(1) 例えば有機的連帯を基礎とした職業団体が、社会の道徳的統合という欲求に応える「有益な」機能を論証したなかで、人々がそこに親密な関係によって結びつけられるとき共同的連帯に対する熱烈な感情にはぐくまれるであろうという、個人に対する機能的結果についての信念が披瀝されている。連帯の道徳的規制のなかにこそ人々は「喜びの源」を見いだすことができる。それゆえに、道徳的規制の弛緩や欠如、つまり無規制（アノミー）は、個人に緊張と苦痛を強い、自殺にすらおいやる逆機能的結果をもたらさずにはおかないであろう。そのほか、いくつかの箇所で個人の欲求に対する同様の機能的アプローチがみられるが、デュルケームの支配的関心は、やはり「もの」としての固有の特性をもつ社会的事実に関し、個人の欲求や必要と必ずしも関係なく観察できる客観的機能の説明に向けられていたことは確かである。彼の方法の大きな特徴は、「社会的なもの」を一つの体系としてとらえ有機体論的発想を拠りどころとした方針を展開したことにある。その社会理論は、社会的行為や相互作用の体系としての論議を主題としていないし、そのためにこれらを主題としたジンメルのような場合とは対照的に機能主義の方法でも全体論的見地を貫こうとした。

しかしながら、そのさい全体的な社会が有機体に類比されそれの欲求が分析の前提とされたけれども、科学的に説明される現象は、常に部分的な社会的事実であった。部分的諸事実の客観的機能を、体系として把握される全体との

関連において説明する分析方法は、有機体的発想に拠りながら全体を実体化する単なる生物学的有機体論とは基本的に区別される。デュルケームが提示しかつ自ら深めた機能分析の対象が、社会体中に含まれながらそれの特殊部分であるということは、研究範囲を制限し特殊な問題の研究を積むことが先決であるとする実証主義の方法と深いかかわりがある。社会学の学的性格を定義したなかで社会学が制度の発生と機能に関する科学であるとした言明こそ、それの直截な表現であった。

機能分析とよばれるものには、すべて「その根底に暗黙的であれ明示的であれ、特定の体系の機能要件（欲求）の概念がある。」[2] デュルケームの機能の定義にも、これは当然含まれていた。その場合、分析対象とされる社会的事実によって充足され奉仕される欲求の帰属される対象として、全体としての社会有機体（l'organisme social）が想定されていたというべきであろう。それは「機能が当てがわれる項目」の分析に先立って概念的に構想され、機能的欲求は、全体としての社会有機体の総合認識を志向する総合科学としての社会学の認識観点に基礎をおくものであった。ただそのさい留意すべきことは、この観点から社会学を規定し、それが社会諸科学の体系ないし合体であることも承知されながら、社会的現実の特定の限られた部分に認識関心が制限されたことである。モースなどが未開社会について行なったのと、同程度には全体認識の問題に専念するところがなかったし、全体の機能的欲求についても、それ自体は必ずしも実証的観察の対象とはならなかったのである。

機能要件の概念は、今日でも依然「機能理論において最も曖昧で、経験的に最も論議の多い概念の一つである。」[3] このことはデュルケームの場合も例外ではなかった。しかし、社会的事実に関する個別的関心に劣らぬくらい総合化への志向は強かったし、この点で単なる「部分志向的機能主義者」とは区別されるものがある。[4] その機能分析において、機能要件（「社会の欲求」）が社会有機体の「健康な」欲求として明示的に前提されるものがあり、それの客観的な対応関係のなかに病理的認識の規準を求めようとした点も特徴の目立った一つであろう。そのさい強調される「欲

求」は、社会有機体の「健康」にとって「最小限不可欠なもの」、「それなしには生きてゆけない日常の糧」である。この観点では、機能の含意は社会的に何らか「有益な結果」を生み出す対応だけに限定される傾向がある。そこでは、「社会的事実の機能は、それが何らかの社会的目的に対して維持する関係において常に求められなければならない」(*Règ.* p. 109)。このようにして、対応関係のなかで社会体の生命活動にかかわりのない関係や、健康を脅かすほどに破壊的な結果を生み出す対応に機能の語を当てることは拒否される。この方針は、社会現象の病理性判断に関する規準と深い関連をもつものであったといえよう。社会構成の分化の過程を論じたなかで、社会の生命力を集中させる分化を「正常」とし、有機体内部にあってそれを犠牲にして生活する別個の有機体の形成を病理的現象とみて生物有機体における癌細胞に喩えたのはそれの明らかな例である。このような説明は、共同態としての社会の全体的生命活動を理想とした彼の価値関心とも結びつき、資本家階級の形成を「解体現象をひきおこす分化」とみる評価的認識ともかかわりをもつことになる。

もとよりこの場合の「欲求」にしても、観察主体によって言わばア・プリオリに措定されるものではありえなかった。「欲求」の内容が、それの依存する一つの有機体としての社会の構造的諸要素の全体的な複合との関連において説明されなければならないものであることは、その場合にも正当に認識されていた。この重要な観点を理解するためには、彼が社会の説明について依拠した有機体モデルの必要な諸点について予め知ることがなければならない。

(1) デュルケームは、社会的事実の機能が社会的に有益な諸結果を生み出すことにあるとしたが、それが同時に個人に対しても役立ちうるし、事実役立っていることが直接の存在理由でもあると考えている。

(2)(3) R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, rev. ed., 1957, p. 52.

(4) デムラス三世は、機能主義の立場に大きく「構造主義」と「機能主義」の二種があるとし、前者は、その特徴が分析焦点を部分に求め全体は一種の背景をなしている意味で "part-oriented" であるのに対し、後者は全体の構成部分を全体への貢献によって説明する "whole-oriented" な特徴をもつとみた。この対照的な両立場は、マートンとパーソンズの機能主義に

よって各々代表されている。デムラス三世は、デュルケームが後者に属するものとしたが、われわれのみるところでは、「構造主義」者としての比重の方が高い。Cf. N. J. Demerath Ⅲ, "Synecdoche and Structural-Functionalism," in N. J. Demerath Ⅲ and R. A. Peterson, eds., *System, Change, and Conflict*, 1967, pp. 501—518.

四

社会（生理）現象を個人意識に超越するものとみなし、その特異性によって「社会的なもの」の定義を下したデュルケームは、それを経済的であると同時に政治的・宗教的・道徳的な生きた全体にかかわるものとしてとらえ、全体性によって特徴づけられなければならないことに注意しながら、社会の構造にそれを関連づけて説明する社会学主義の研究方針を掲げた。「社会的なもの」の内容は「何よりも先ず諸観念の一全体である」とみた彼にとって、社会の素材をなす社会現象は、すべての心理的現象が脳髄の状態の間接のあるいは直接の影響をもつのと全く同じように、社会の構造にその基礎をおいている。そうして、社会の構造的＝解剖学的諸要素は、生物有機体の場合と同様に機能的な相互の結びつきによって構造的全体を構成し、その全体が内部的環境（milieu interne）をつくりあげることになる。社会現象は、このような環境に依存し、それによって変化する限り、「何らかの重要性をもつあらゆる社会過程の最初の起源は、内部的環境の構成のうちにおいて求められなければならない」（*Règ.* p. 111）。その構成は、このように社会の「基体」として特徴づけられる。

この場合、内部的環境を形成する諸要素が相互に依存し合う関係にあると考えられるとき、数学上の函数という意味での諸要素間の機能的な相互依存の意味あいが念頭におかれていたことであろう。また諸要素の全体としてのまとまりが、一つのシステムとして観念されていたことも確かである。「社会環境において生ずる諸変化は、その原因の如何に拘らず、社会有機体のあらゆる方向に反響し、あらゆる機能に必ず多少とも影響を与えることができる」

(*Règ.* p. 115)。社会の構造的諸要素の相互関係の変動は、社会現象や機能的な諸部分の結びつきの変動を生み出す決定条件であることが、そこで強調される。社会体の構造的諸要素の関係を一つのシステムとしてとらえるこの見解は、所与の変動の過程を系統だてて首尾一貫して分析し説明するためのすぐれた基礎を提供するものであったといえよう。

ところで、そのシステムは、それが内部的環境と名づけられたことからもすでに明らかなように、実際には限定された閉じた体系を形成するものではない。内的構成の変化は、それの外囲 (circumfusa)、特に囲繞する外部諸社会との間に交わされる作用および反作用に依存する。しかし、外部的環境が社会現象に何らかの作用を及ぼすことができるとしても、それは結局のところ内部的環境の介在によってしか――つまり当該システムの統合水準（構造）に関連づけられ、それを媒介としてしか――その影響は感じさせることがない (*Règ.* pp. 115—6)。社会現象の起源が先ず内部的環境の構成のうちに求められるとしたのもこのためにほかならない。(1)

生物有機体との類比から出発するこのような構想をもとに、デュルケームは、生きた全体としての社会が依存する内部的環境を構成する諸部分の合成様式に関し類型化の必要性を提言する。彼は「ホルド」と名づける真正の「社会界の原形質」(protoplasma du règne social) を「一切の社会類型の淵源する胚種」として先ず構成した。この社会的集合は「いかなる確定的な形態をも、またいかなる組織をもたないような絶対的同質の一つの集合」について思惟的に構成された一種の理念型 (type idéal) である。それは現象として具体的に生起する「不確定な多数の個体に代置する」ため、それらの諸特徴のなかの特に本質的な諸特徴ないし諸特性をもって分類の基礎に役立てられているものであるために、「この特徴づけに正確に適合するような社会は歴史上存在しない」(*Règ.* p. 83)。そうした含意のホルド（＝単一環節社会）は類型化のための準拠点に用いられ、それが互いに結びつく合成の様式や程度に応じて措定されるいくつかの社会類型が設定される。単純多環節社会、単純合成的多環節社会、二重合成的多環節社会などがそれである。各々は社会的諸現象の依存する原因やそれの変化を規定する社会構造の特有の諸性格を決定するうえに役立て

られる。このように、「完全に単純な、すなわち単一環節社会を基礎にとり諸社会の示す合成度にしたがってこれらの社会の分類をはじめ」、互いに異なった構造を歴史的発展の連鎖のなかに関連づけるなかで、「原初的諸環節の完全な融合が生ずるかどうかに応じ、これらの部類の内部に異なった諸変種を区別する」方法論的規準が提示される（*Règ.* p. 86）。そこでは、有機体がただ一つの同じ解剖学的単位の種の結合を示すに過ぎないという事実から、生物学において種が存在するのと同じ論拠で、社会種の多様な存在性が考えられる。

しかし、生物体と社会体には一つの大きな差異がある。それは前者においては、（「遺伝的諸習性の力」という）「外部からきて変化を与えようとする諸誘惑に反抗して（種的）諸特徴を固定しようとする一つの内的力」があるのに対して、社会体においては、そうした内部的特徴が欠如している」（*Règ.* p. 87）点である。「社会の種的諸特徴は、一つの世代だけしか持続しない」し、「新たに生じた諸社会は、それらを生ぜしめた諸社会と種を異にするのが普通である。」したがって「社会種を特徴づける諸特性（属性）は、環境の影響を受けて無限に変化し着色されている」（p. 87）。複雑である程それを構成する部分は種々の結合をなしうるであろうし、「社会の種的類型は、最も普遍的かつ最も単純な諸特徴を除けば、生物学においてみられるような確定的輪廓を示さない」のである（p. 88）。

デュルケームは、生物学の類似のモデルに拠って社会の本質的特徴に関する「構造」概念を構成しながら、社会と有機体間の基本的差異は、このように十分に承認していた。しかし、社会の認識については、生物学から生命現象に関する豊かな示唆を全面的にとり入れている。社会の解剖学的事実を構成する諸部分の結合の様式――「構造」――を、静態的にではなく動態的に、〝生きたまま〟とらえようとする観点などが、それの目立った例証である。社会構造の類型を設定し分類することを任務とする社会学の特殊部門として、彼は社会形態学を設定し、対象の構造論的な取り扱いによって、コントの社会動学に代表される文化の一元的進化論に対する批判論拠とした。そうして、社会種の分類方法によって、諸社会を文明の状態に応じ分類する歴史的段階方法に代わる社会学的分類の基礎とすべきこと

を提唱した。これらのことについては、われわれもすでに論じたが、デュルケームによるこのような構造論的方法は、周知のように、対象を全体的統合のなかでとらえる機能主義の立場として、ラドクリフ＝ブラウンやマリノフスキーなどによって受けつがれ大いに発展をみた。だが彼らはデュルケームから深い示唆を得ながら、機能分析と不可分に結びついていた歴史的方法の放棄という致命的な難点を引き受けたように思われる。われわれとしては、全体を生きたままにとらえようとしたデュルケームの視点を同時に復活させる必要があるであろう。

社会形態学が純粋に静態的な科学ではなく、動態的な科学であらねばならないことに注意をうながした一論文のなかで、デュルケームは構造の特性について次のように述べている。「構造に関する諸現象は、機能的な諸現象よりもより多く固定的なものをもっている。しかし、この両種の事実の間には程度の相違が存在するにすぎない。構造そのものは生成（devenir）において見出される。しかもそれは生成の過程を閑却されないという条件によってのみ明確にされる。構造は間断なく形成せしめられ変形せしめられる。構造はある程度の固定化に到達した生命である。しかし構造をそれが由来し、あるいはそれが惹起するところの生命から区別することは、分離すべきでないものを分離するのに等しい。(2)」

（1）環境における変化と、それへの対応関係に結びつけて、特定システムの内部的緊張や変化を考えようとする複数系モデル分析につらなるこの観点が、現実の社会の動態分析に不可欠であることを鋭くみぬきながら、デュルケームは、自らの研究のなかでそれを十分に役立てていないうらみがある。今日の機能分析において、この観点は、限定的な一連の分析的諸変数の相互依存の関係を一つのシステムとして特徴づけ、それの存続と変動の過程を環境（外部システム）に属する諸変数の変化に関連づけてとらえる相互連関のシステムズ分析の方法を厳密化する試みのなかで一段と有効性が証明されつつある。Cf. G. C. Homans, *The Human Group*, 1950.

（2）É. Durkheim, "La sociologie et son domaine scientifique," dans A. Cuvillier, *Où va la sociologie française?* 1953, p. 190.

五

社会の構造を生成の過程において見出すという動態的な観察観点から、いくつかの重要な方法論的規準を導き出すことができる。「平常的と病理的との区別に関する規準」も、そうしたなかの重要な帰結である。デュルケームは、社会有機体の諸現象が本質的にはそれ自体にとどまりながら、場合に応じて種々の異なった形態をとりうることに予め注意をうながした（*Règ.* p. 55）後、それらの諸表現が種の全範囲に亙り普遍的・一般的なものをもって平常的・正常的現象とすることを先ず提言する。この主張は、対象をそれを表現する外的指標を通して観察するという実証主義の基本要請にしたがったものである。しかし問題は、観察によって先ず定立された特定現象が、もし一般的・普遍的特徴を示すとすれば、それを決定し発現させる諸条件に結びつけて、それの一般性の説明を行なうことがなければならない。けだし「現象の平常性は、ただそれが考察される種の存在の諸条件に結びつけられることによってのみ、あるいはこれらの諸条件の一つの機械的に必然的な結果として、あるいは諸有機体をこれらの諸条件に適応させる一つの手段として説明されるであろう」からである（p. 60）。しかし、社会諸条件を動態性においてとらえるとき、普遍的な観察事実は、それを発現させた諸条件とつねに対応しているわけではない。[1] このことから、ある社会現象が特定種の全域に亙って普遍的に観察されるにしても、その普遍性が決定され、それを発現させた条件が過去のものであり、新たに出現した現実の諸条件に結びつかないとすれば、その普遍性は外見的なものに過ぎず、〝虚偽の貼札〟でしかないとする判断に導かれる。デュルケームは、新たな条件に適う社会の欲求に十分対応しないという意味で、それは異常的であると考え、ここに病理性を正常性から区別する実質的規準をみた。

生きた全体としての社会やそれの構造を、時間的系列の流れのなかに定着させようとする意図からすれば、社会有機体の欲求も、それの内容は歴史的発展過程のなかで考察される社会の特殊構造に共通な諸特徴に結びつけて説明さ

れる必要があるであろう。例えば制度の機能も、所与の「社会環境の存在する状態」との関係によってしか決定されない。それの現実が複雑・多様であるように機能の判定も単純ではない。これは、多様な社会種の存在を無視し、「人類」のみを現実の存在者とみることから社会進化をこの普遍的なものの進化と同一視したコントが、結局は機能の判定規準を一つしか導き出せなかったことに対する批判的見解として提出されたものであった。社会体の機能的欲求（要件）は、その社会の共通の動態的な構造的特徴を明らかにする鍵である。

各部分が相互に依存し合う社会有機体を自己適応的反応の体系としてとらえたデュルケームは、それがその全体性において環境のなかに自らを維持する一つの社会システムであることを認めた。このことは自己の反応を有機的に設定する有機体との類比によって引き出された。社会有機体は、何よりも先ず「外部から攻撃してくる破壊的原因に対して身を守る器官と機能の一体系である。」それは恰も外部環境からくる刺戟に適応して反応するのを全生命とする一つの生活体にたとえられる。現実に、こうした社会防衛の機能をになうものは軍隊である。産業は生活体の養育に当り、家族はそれらの再生と持続を確保する機能を果している。その他、社会は均衡を保持することと、周囲の諸条件に適応させる機能を必要とする。それは法、道徳、宗教の社会的役割であらねばならない。これは社会の「三大規制機能」であって、相互の区別は明確にしうるにしても明らかに親縁関係がある。国家は、このような三つの規制的機能を果たす器官――マートンにおける機能分析の鍵概念でいえば「社会機構」――にほかならない。(2)

生命現象の表現としての社会的機能の概念は、初期には、このように生物学の発想からとられたが、後期の著作ではもっと的確な表明をみている。最後の著作である『宗教生活の原初形態』のなかで、社会生活における日常的・非日常的活動――「俗」と「聖」――の異質的な両機能の循環に論及した部分などは特筆される重要性をもつように思われる。つまるところ、「欲求」とは相互依存している一つの全体としての社会システムが、環境のなかで自己の動的均衡を維持するうえで不可欠的に充足されなければならない「問題」に言及するものであり、ベールズが小集団の

成員間に行なわれる相互作用の内容分析を展開するなかで確かめたところの行為体系の四つの「体系の問題」や、この図式を発展させ、社会体系の機能的要件としてパーソンズが認めた四つの基本的範疇――「適応」・「目標達成」・「統合」・「潜在性」（「類型維持」と「緊張処理」）――に素朴ながらすでに留意したものといえるであろう。ただデュルケームの機能的アプローチにおいて、分析はあるときは経験的に観察可能な具体的現象について行なわれ、あるときは現象諸形態のいわばかくれた本質的諸特徴を決定するものであり、これらの方法論的区別は必ずしも明確にされていないうらみはある。

ところで、それぞれの社会的欲求（要件）は、「社会がそれを欠いては生きてゆけない日常の糧」であり、「最小限不可欠なもの」である（*Div.* p. 14）。また、それは「社会そのものの存続条件として社会構造の本質的特性を決定するもの」でもある（p. 85）。社会を常に生成において認めようとしたデュルケームは、諸欲求が「本質的にそれ自体に留まりつつ、それの表現内容は、場合に応じて種々の異なった形態をとりうる」ものであり（*Règ.* p. 55）、歴史的に与えられた社会構造の変化する存在条件に結びつけて説明されなければならないものであった。[3] このことから、社会の構造変動に伴う社会的欲求の重要性の歴史的変化に論及し、かつては首位を占めた軍事機能が産業機能にとって代わる変化をサン・シモンやスペンサーの軍事型社会から産業型社会への図式の示唆によって承認したのである。

しかしながら、社会体を諸機能の全体的性格で特徴づけようとしたデュルケームは、「諸機能は相互に調節し合うという条件においてのみ、すなわちある限界内において相互に抑制し合うという条件においてのみ調和的に発展しうる」という思想をさらに堅持していた（*Div.* p. 216）。各機能は正常にはたらかないと、社会全体がその影響を受けるであろうし、反対に社会的健康の一般的状態は、各機能に影響を与える（Cf. *Le Socialisme*, 1928. p. 22）。彼は道徳が表現しているものをもって社会の最も基本的な存在条件であるとみなし――連帯主義の思想に拠って――経済機能に対する道徳の規制機能のなかに前者のアナルシー傾向を抑制する効果を期待したが、その場合でも、「道徳が経済その

他の機能を過度に嚮導するときは、必ずそれらを痲痺させる」(*Div.* p. 218) であろうことを危惧し、「道徳過剰」がもたらす逆機能を念頭においていた。「適度である場合が健全である」という命題こそ彼の思想の中核をなすものであった (cf. p. 219)。

(1) この考え自体は、機能の当てがわれる項目と、それが対応するはずの全体としての社会の欲求とが別個に変化する変数であるという、機能分析にとって重要な観点とも結びつきをもつことになる。デュルケームは、生物学からの比喩により、器官は同一の状態に留まりつつ、機能を変化させることもできるし、また、かつて何かの機能を果していたのにそうではなくなり、「何の役に立つこともなしに存続する」という「残存物」(survivance) についての含意を確かめた (*Règ.* p. 91)。実証科学の見地では、「何ら役立たなくとも、ただそれが存在の性質中に当然含まれているというだけですでに平常的である」(p. 59)。

(2) É. Durkheim, "Les études de science sociale," *Revue Philosophique*, Tome XXII, 1886, pp. 61—80.

(3) デュルケームは、社会の異なる主要な機能的欲求を基準として、それぞれ自律性をもった社会の下位体系を区別しているが、各下位体系相互の全体としての関連に関する思考の不十分さについてはこれまで批判がなされてきた。デュルケームは、歴史的全体としてのそれら相互の関連を別段問題にしなかったし、諸領域の構造的統合についての関心も乏しかった。しかし、社会を一つの生きた有機体として問題にする傾向が強いことから、先ず各領域を切り離して考えて、次にそれらの関連をみるという思考の欠陥は免かれている。社会学の性格規定で社会の諸機能に関する諸科学の社会学化の必要を強調した理由も、さらに又社会を道徳生活の焦点とみたことも共に社会を全体性においてとらえる考えにつらなるものがあるといえよう。

六

「はたらき」としての諸機能は分析的に区別して考察しなければならないとしても、社会は諸機能や諸器官の単なる「寄木細工」ではない以上、そのすべては生きた全体のうちにとらえられる必要があろうというものである。社会

の基本状態に関するデュルケームのイメージからすれば、社会をただ「いくつかの生活機能を目的とした有機体」と理解するだけでは内実を貶価することとなる。「この有機体には一つの魂が生きている」(*Social. et phil.* p. 136)。一つの体系としての社会体が変動する基礎過程を、相互に依存し合う諸部分の複合が全体として環境のなかでつくり出す動的均衡のうちに見出すという体系分析の方法だけにとどまらず、変動の決定力を全体としての体系の生命的要素のなかに発見することこそが、機能をもつ諸部分を分離して関連を問う一部の機能分析とは区別されるデュルケーム独自の問題観点である。彼は「生命は全体のうちに存在し、諸部分のうちに存在しない」という生物学の命題を社会学に適用することにより、各個の社会を表示する独自な総合(synthèse *sui generis*)が新しい現象を生み、それが単独の意識内に生ずる現象とは異なるものであるとした(*Règ.* Préface de la 2e éd., p. xvi)。社会の生命それ自体は固定化・結晶化しうるにしても、生命は「落ちる分銅を押しあげるための努力」(ベルグソン)をもって本質とする。生成は既成の状態の系列ではなく、出来あがりつつある何ものかであり、無限定なものである。社会学は、生成のなかで継続的な状態を固定化することにより社会的生命の本質的要素を表示することがなければならない。

デュルケームは、社会現象を「もの」として取り扱うことを方針としたためにかたくなに社会実在論を説くものとする誤解を生じたが、自らは何よりも社会を活動性においてとらえた。さらに「社会的環境がますます複雑化し、ますます可動的になるにつれて、既成の伝統や信仰はそれだけ一層しなやかな何ものかを身につけ、そして反省能力が発達する」ことを強く要請した。「まさにこの能力こそは、より可能的でより複雑な環境に適応するために、社会および個人にとって不可欠のものである」(*Règ.* p. 96)。

犯罪の機能分析において、この現象を正常的とする有名な主張が導き出されるのも全くこのような観点に立つためであった。犯罪を正常(常態)社会学上の諸現象のなかに分類することは、犯罪が単に不可避の現象であるゆえではない。それは、この現象が「公共的健康の一要因」であり、「あらゆる健康な社会の構成的一部分」をなしていると

考えられることによる（*Règ.* p. 66）。この一つの理由としては、集合意識（共同態としての社会）の冒瀆である犯罪が、それに対する復讐行為としての社会の集合的・激情的反動をひき起こし、その反動（社会的制裁）が、社会の「いのち」の強度を誇示し、確認させる機能をもつことが先ずあげられる。犯罪には社会的凝集の力を試す機能がある。だが一層重要な機能は、所与の確定的な社会的生命の凝集化に果たす効果というよりか、反対に共同態が過度に硬直化・形式化することからくる逆機能を緩和し、社会に柔軟性と生気を吹き込む機能をもつという点にある。生成に対し社会は反抗的であってはならないと信じたデュルケームは、社会の活力を喚起する犯罪の積極的な機能の評価に結びつけてソクラテスに代表される（非同調の）犯罪を例証としながら、犯罪のなかに社会の健康の原基（étalon de la santé）としてもつ一層有益な機能のあることを主張した。「道徳意識に必要な変更の途を開き」、集合意識のとるであろう形態を予め決定するという社会的要求に対応する犯罪によって侵害される集合意識は、たとえ一般的なものではあっても社会の新たな生存条件に応じようとする要求に対応しない限り、それは「虚偽の貼札」でしかない。したがって、そのような集合意識を冒瀆する逸脱は、例外的であっても社会の健康のために不可欠の統合的要素であり、有益である。

われわれはここに、機能分析に二つの含意があることを知るであろう。先ず「社会現象の機能は少くとも多くの場合、これらの現象を生じた先有原因を維持することにある」（*Règ.* p. 96）。けだし社会有機体の欲求は、その内に含まれる何かに及ぼす並置された諸要素の全複合の結果であるからである。この説明は、最後の分析において社会現象の機能が既存の諸事象の状態に対するそれの因果的貢献であることを裏がきすることになる。しかし、社会有機体の欲求に関する説明のなかで、デュルケームは既存状態の存続条件だけに視点を限定していない。この第二の分析視点において、欲求の内実はそれが依存する社会体がそうであるように、不断の生成過程において説明されるべきである。彼の欲求の概念を「社会の存続に必要な条件」という意味に発展させたラドクリフ＝ブラウンは、機能を社会構造の

パターンを維持するのに果たす貢献であると限定する傾向があったが、デュルケームにとって社会は、本質的に動態的な性質において把握されなければならないものである。生きた全体としての社会は、集合的生存の諸条件における他の諸変動に並行する変形の中断のない一つの連続であるとみた彼は、社会が固定化した状態が存続する条件や理由について実際には一度も考慮を払うところはなかった（Cf. *Reg.* p. 133）。この点は、どれ程類似があろうとも、彼の立場を一部の機能主義者のそれから区別する重要な点である。(1)

デュルケームの念頭にあった社会体のイメージは、静態的に統合された安定体系ではなく、このように不断に生成する動的な体系であった。社会変動を問題にするうえからみれば、その体系概念に含意される鍵概念は、諸関係の既成のパターン維持という意味での自己維持（self-maintenance(英)）ではなくて、生成・生命過程そのものの存続（persistence（英））であった。けれども、社会を多少とも自動的な調整によって均衡のバランスを回復する自己均衡体系とみる傾向が強くうかがえる点は、調和を重んずる彼の思想とも結びつき、やはり否み難い特徴であったといわなければならない。

（1） Pierce, op. cit., p. 159.

七

生命体のうちにみられる原因と結果の循環命題は、このようにして社会領域に適用される。それは、社会を固定した安定状態とみる観点からは十分に評価されないであろう性質のものである。これは社会の安定を攪乱させる犯罪と社会の自動的調整にはたらく刑罰を例にとってよく説明されるであろう。すなわち、刑罰を構成する社会的反作用の強さは、犯罪によって傷けられる集合感情の強さに基因するが、結果としての刑罰の機能は、それを生じた先存原因である集合感情を同一強度において維持することにある。「結果は、その原因なしには存在しえないが、しかし原因

もまたその結果を要求する。結果がその活力をひき出すのは原因からであるけれども、結果はまた機会がくれば、この活力を原因にかえすのであり、したがって原因が結果の影響を受けなくともそれは消滅するところがない」(*Reg.* p. 95)。「原因が知られていれば、たやすくその機能を発見できる」(p. 96)。

原因を結果に結びつける連鎖に認められる互酬性(réciprocité)の特徴は、『宗教生活の原初形態』中儀礼の社会的機能を論じた箇所でも重ねて表明されている。そこでは、聖性を獲得したトーテムの画像(徴章)が人々の非日常的な宗教体験を客観的に意味づけ、対象化するための手段であるばかりか、その聖物が宗教体験を想起させる機能をもつことを論じながら、聖物に対する信者の行為を規定する行為規則としての儀礼の機能に言及される。トーテムの徴章は、宗教的祭礼のために人々が集合することから生れる聖なる期間に聖性を獲得する。激しい宗教的興奮状態にあってトーテム徴章は、実証的に検証可能な経験的実在を指示対象とする記号というよりか、非経験的な宗教体験を表示する象徴となる。その事物がおびている聖なる特徴は、この事物の本具的物性に含まれているのではなく、その物に附加されているのである。したがって、非日常的な体験が忘却されるにしたがい聖物は日常的感覚でおおわれた俗的事物に変質することであろう。この変質を阻止し、聖物性を獲得させるところに宗教儀礼の重要な機能がある。儀礼の機能は、聖物がトーテム原理ないしトーテム神の外的感覚的形態であると同時に、氏族のようなある社会集団を他の集団から識別し同一氏族の成員性を表示する象徴としての意味をもつ。このことから、聖なる存在とのコミュニオンを介して集団の社会的凝集力を強めることになる。

このようにして、儀礼が聖なるものについて集合的体験を強化する強さ(結果)は、儀礼によって強められる集合的宗教経験の強さに原因がある。儀礼の機能は、それと同時に聖性についての強い集合意識(原因)を恒常的に更新し社会の活力状態を強化することにある。デュルケームは、「機械的」と名づけた連帯の自然的基盤がくずれ、日常的・俗的な経済領域の分業体系による連帯を基礎とする社会が出現をみるとしたとき、その構造変動に関して因果分

析を試みたが、儀礼については前者の連帯のもとで社会集団が周期的に自己を再確認する手段としてはたらく循環機能を宗教論で詳論している。しかし、それが社会基盤の変化と共に日常的経験のなかで革命的聖性を操作する機能とか、あるいはそれが日常化・形骸化する経過など一層われわれの知りたい諸点については、特に立入った論議を展開するところがなかった。

犯罪とそれに対する刑罰制裁の機能について循環命題が適用されていることは先に述べたとおりであるが、デュルケームは、社会の構造をその内部に特徴的な逸脱への圧力（例えば「自殺への傾向」）を不断に生み出しながら、同時にそうした逸脱傾向に統制を加えるか、あるいは緊張処理の機構を発達させる経過について留意はしていたように思われる。社会は、このような自己防衛のはたらきや機構を内在化させることによって均衡の維持が可能となり、現に犯罪のような逸脱は、社会的制裁を喚起し社会の自己防衛力を再確認させる機能をもつことを論証したのである。犯罪のような現象は、それの与えるある結果のゆえに「有害」でありながら、それが反対作用（刑罰制裁）によって規制的によく中和されるならば、何らの害悪をも生ずることなしに「積極的諸関係を社会のいのちの基本的諸条件に対して保持することになる。」けだし、犯罪はそれが罰せられ法的に禁圧されるときにのみ有用であり、一定の標準よりの過度な発生は病態的とみられるからである（*Règ.* p. 66）。犯罪の有用性は、社会の秩序が生成的生命を保つうえで機能的であるためとみられたにしても、その行動を産出する社会構造内の緊張の源泉は直接の考察対象とはされなかった。(1)

均衡論によるデュルケームの機能分析は、正当にも社会についての本質的に動態的な性格を認めながら、分析単位を社会の全体性に求める傾向が強いこともあって、社会変動を生み出す源泉を社会内在的な緊張・矛盾のうちに認める観点が明確にうち出されなかった。マートンは、デュルケームのアノミーの概念図式に含まれる重要な諸要素を析出し、諸要素間の調整関係の破綻のうちに犯罪をも含む逸脱行動をもたらす構造内的緊張を論じ、機能分析の理論的

見地から、そのなかに変動や変革を生じる根源を求める社会構造論的観点の研究を発展させたが、当のデュルケームの分析方針には、それは大して重要性をもつものとしては扱われていない。

このことは、デュルケームが社会学の対象とした「社会的なもの」の機能やそれが個人に加える拘束の考察に専念するあまり、拘束を受け、かつ「社会的なもの」の基体を構成する個人に関し、それが他の諸個人と相互に関係し合う結合態の単位であり、また利害状況のなかで目的手段のコンテキストにおかれた行為主体であるとする観点がよわく、社会構造論的把握にも十分成功していなかった事情に主に起因するように思われる。デュルケームは、「社会的なもの」の定義に当り、個人の行為から出発してそれによる再構成をはかる個人主義的な方法論を選ばなかった。共同態を社会的事実としての特性において規定し、それを考察対象とする彼の社会学の特殊性は、機能分析の場合でもその方針を特殊づけるもとをなしている。(2)

(1) G. Richard, "La pathologie sociale d'Émile Durkheim," *Revue internationale de sociologie*, Mars-Avril, 1930. pp. 113—126.

(2) デュルケームは、現行のものを新しい生命・精神をもって生気づける必要を説いたが、そのために「確定し、固定した」現実態の科学的認識の重要性を貶価したわけではなかった。その反対である。例えば、学校体系を論じたなかで同体系が確定的・固定的教育制度の全体と、それによって構成された機構の内部にあって、その機構を加工しまた変化を促すところの諸観念という二つの変数から成り立っていることに注意したのち、教育学者に対して、彼の憧憬する観念や理想の実現を願う余り所与の制度から解放されることを夢想し、それの現実の力に無関心な態度をとることをいましめている（*Éducation et sociologie*, 1922, pp. 146—9）。

八

機能分析の方法は、デュルケームの研究のいわば大きな縦糸として随所にその有効性が証拠だてられているが、それの最も独自なものは、平常的と病理的の区別に関する規準に関連づけて異質的諸機能（役割）の連関＝分業体系の

可能な表現諸形態の評価に論及した『社会的分業論』中の箇所にみることができる。同書の課題の一つは、「社会構造の本質的諸特性を決定する」所の「社会の全体的統合」の基本類型として、「機械的」・「有機的」という二つの社会連帯を構成し、社会のこの統合基礎が前者から後者に進化する構造変動についての因果分析を深めることにあった。そのさいの説明原理としては社会形態学的諸事実が選ばれ、それの変化に基礎づけて分析がなされている。その結果によると、「分業は諸社会の容積に正比例して変化する。しかも分業が社会的発展の過程において継続的に進歩するのは、諸社会が規則正しくより密度を高め、かつ極めて一般的に容積を増加してゆくからである」(*Div.* p. 244)。

『社会的分業論』の課題の第二は、このような変動過程のなかで新たにその存在が与えられた社会構造――「社会体が全体として存在する諸状態」――のもとで、道徳的合意の確立という社会の基本的要求を満たす可能な分業体系を探索することであった。この第二の課題に対する分析の基本形式は、今日の社会学的機能分析の方法論のなかにそのまま生かされている。特にことわられてはいないけれども、マートンが機能分析の範例中に掲げた同じ発想方式を、われわれはデュルケームのなかにみることが可能である。その問題設定の方法をマートンの用語によって理解すれば、そこには機能分析の重要な鍵概念が確かに含まれている。すなわち、①あらゆる機能分析の前提となる機能的要求(要件)の概念、②要求の具体的な充足様式あるいは特定の機能を営む手段となる社会機構(social mechanism)、③それらの機構が現実にとる形態の可能性や変異範囲を制限する構造的脈絡、④機能的な等価物ないし選択項目など。[1]

これらの諸概念のなかでデュルケームの含意として最も独自な点は、分析のための明示的基礎として措定された「社会的要求」(機能的要求)の内容であった。すでにわれわれも知ったように、彼は、社会の欲求が基本的な特質をそのままに保ちながら、それの現実の表現は歴史的に生起する社会の特殊な構造の諸特質に依存することから常に変動すると考えた。社会的統合要求の内実も、産業にその全基礎をおきかつ発達した分業に基づく社会におけるそれと、機能の未分化な機械的連帯を基礎とする社会におけるそれとは自ずと異なることが強調される。この場合にも、

道徳的統合という欲求はいくつかのほかに想定される欲求の一つに過ぎない。デュルケームは、このことに重ねて注意をうながしながら、現象として生起している現存社会の存在条件に対応するもののうち特に優越している社会的欲求が、生産力の拡充のそれであることに留意した。社会の統合欲求も、経済的価値の増殖という産業化の欲求に従属してあらわれざるを得ない。『分業論』は、実証主義の方法による現実認識の観点より、このような欲求との客観的な対応関係で分業の機能を考えることが一つの中心課題であったといえる。

しかし、デュルケームは事実認識に対する客観的科学への信仰に強く支えられながら、それを自らの強い問題関心の満足に積極的に役立たせようとした。われわれのなかには、彼の著作のなかに次のような言葉があるのを発見して驚くものがあるかも知れない。それは生涯を通じて彼の研究の基調をなすものであったと考えて差支えないであろう。「実在の研究に没頭しようと思うからといって、われわれがこの実在の改善まであきらめてしまうということにはならない。われわれの探究が単に思弁的興味のみをもつべきであるならば、一時間の苦心もそのようなものに注がれるだけの価値はない。」「注意深く理論的問題を実践的問題から切り離すのは、後者を無視するためではなく、それどころかこれをよりよく解決しうるためである」(*Div.* Préface de la 1e éd., p. xxxix)。[2] 現象として表現をみている諸事象の批判的認識は、機能分析の方法を独自に駆使することによって可能とされた。このことは社会的欲求の概念内容に関して歴然としている。批判的認識の文脈で社会の欲求として措定された道徳的統合は、生産力の拡充という社会の第一次的欲求に従属した価値表現である「幸福の崇拝」による拘束の結果、人々の間に失われた社会的合意の基礎を確立しようとする願望—問題関心によって強く導かれている。そこで社会の欲求は、明らかに評価的中味をもつ概念であった。

このような評価的欲求についても、それは現実の社会形態学的諸条件に依存している。そのために、この望まれた欲求充足に機能的なように現実の機構を変革することが課題となる。分業体系が社会の道徳的合意の「基体」として

統合機能を果たすためには、その体系の統合基盤が何よりも先ず参与者の相互の自生的合意によるものとならなければならない。デュルケームは、これの実現のために要求される必要な諸条件をあげた。しかし、このように構想される分業体系は、今後生み出すべきものであって現実には表現をみていない。理想的効果において掲げられるこの社会機構は、実現されている分業体系にとって代わるべき機能的等価物として提起されるものである。デュルケームは、新たに与えられた社会の存在条件（「構造的脈絡」）のなかで実現可能ないくつかの分業形態をあげたが、そのなかで彼が有機的・積極的分業とよぶ充足様式こそが正常な形態であることを確信した。分業形態の可能なそれぞれは、社会連帯―道徳的統合という社会的欲求を充たす社会機構としての観点から評価される。そのさい、社会の生命諸力を集中させる分化としてあらわれない逆機能的諸形態――「強制的分業」・「アノミー的分業」など――は、病理的形態である。この場合、正常的と病理的との判断規準は、明らかに事実認識の観点ではなく批判的認識の観点によって選ばれている。前者の観点において正常なものは、特定の社会種の全範囲に一般的なもの、最頻的な特性をもつものであり、病理的なものは例外的なものとなろう。しかし批判的認識によって評価するときは、特定の社会構造類型に平均的・一般的なものは必ずしも正常ではない。いかにもこの観点で有機的連帯が正常といわれるとき、それは例外的なものあるいは理想として掲げられるだけで未だ一般に実現をみるに到っていないものである。強制的・アノミー的両分業体系は、普遍的・一般的な表現形態であるが、社会の統合・連帯要件に正常に対応しない限り病理的なものであらねばならない。(3)

評価的ないし実践的ともいえるこの機能分析の方法が、すでにわれわれも言及した犯罪の病理学的診断に用いられていることをここで再度確かめておくことが望ましい。いわゆる実証主義による判断のみであるならば、自己防衛するところの、あるいは自己防衛せねばならない社会は、所与の既存の社会である。しかし、社会的健康を構成する一部分として犯罪を説明するなかで、特に非同調が例にあげられるとき、それが間接に有用（＝機能的）な社会は、現

存のそれではなく将来においてかつその発達の全体性において考察される社会である。その行為によって正当性が問われた所与の社会に最頻的な諸特徴は、病理的形態とみなされる。そこで(非同調の)犯罪は、将来の理想的社会の胚種がそれを圧しつぶす過度の統制主義から保護するために、既存の社会に対する人々の憤怒を惹きつけさせる機能をもつ点で極めて「正常的な」、また有用なものとなるであろう。犯罪はその行為者の主観的動機・意図とは無関係に、観察者の価値関心(＝「社会的欲求」として措定)に対する対応の評価に基づいて病理性の識別がなされる。この規定では、病理性の規準は統計的平均のなかにはおかれない。明らかにそれとは別の、理想的な、したがって現象的にはしばしば例外的なもののなかにおかれている。(4)

(1) Merton, op. cit., pp. 50—54.

(2) ふつう知られるように、社会学という科学は、十九世紀末の資本主義の発展から生じる社会領域での諸結果や諸状況にある種の社会的規制を加えようとする動きと軌を同じくして出現した。デュルケームは、その規制を道徳的連帯の確立によってはかろうとした最もすぐれた代表者であるが、道徳的共同態の再建のための基礎は、何にもまして科学としての社会学に求められた。彼のこの方針にとって、機能分析の方法は極めて適合的であったと思われる。

(3) C. Bouglé, *Qu'est-ce que la sociologie?* 1921, pp. 142—3.

(4) デュルケームが病理性規定に必要とした「社会類型」に、二種の意味があることに注意したい。それの第一は、純粋に理念的に抽出された客観的構成物である。これが経験的実在との対応において構成されたものとすれば、第二のものは、一定の価値観点によって構成をみた評価的性質のものである。この意味による犯罪の評価は、価値判断に基づき構成された一定の社会種の欲求との対応関係において機能的である限り、社会の「健康の原基」としてもつ有用性が確かめられる。しかしながらデュルケームにとっては、犯罪を正常現象とする評価は、それの頻度が各社会の固有にもつ一定の犯罪比率を超えない限度においてのみ可能であり、それゆえに超過した場合は病態的とされた。これらの点に論及された松下氏は、デュルケームの価値規準が具体的にフランス第三共和政社会の発展にあったとされている(松下武志「デュルケーム社会病理学の性格」、『社会学研究』三〇、一九六九年、九六頁)。

九

デュルケームの遺産のうち、機能分析に関するわれわれの方法論の発展に寄与する一つは、このように機能分析の評価的な発想であろうと思われる。しかしこのさい合わせて留意すべきことは、彼の実践的関心が道徳的合意成立の社会的必要条件の決定にあったとしても、これの推進は実証的科学への信頼に託されたことである。デュルケームは、社会の欲求充足のための可能性や変異の範囲が所与の社会の全体としての構造的脈絡によって制約されるとみなし、その認識に立ちつつ、「あらゆる可能な結合が経験の過程のなかに試みられると信じうる理由は何もない」とした(*Reg.* p. 63)。これは明らかに機能的等価物について論及するものである。この認識から実証主義の見地をはなれ次のような主張にいたることも自然であった。すなわち、「種のうちに普遍化される諸状態が例外として残される諸状態よりもより有益であるということは確かに認められなければならないとしても、それが存在し、あるいは存在しうる諸状態のうちの最も有益なものであるということは承服できない。」「ただ考えられるだけで未だかつて現実化されなかった諸結合のうちにも、われわれの知りうる諸結合よりさらに一層有益なものがあるかも知れない」(p. 63)。

分業体系のなかで連帯を生むことが可能な理想形態についても、それが有益という観念は平常的という観念からはみ出ている。すでに述べたように、この形態は理想的効果によってしか語りえないものである。しかしデュルケームは、それをただ主観的な体系として問題にするだけではなかった。それは科学的論証に耐えうる主題とされた。彼は分業体系の現実を科学的認識の対象として扱う手続きから出発したが、同体系が観察可能な研究対象として扱われるとき、それの構成には連帯と合意を生む統合的な要素とともに、それに対立的な破壊的・抗争的要素も同時に内在的であるという事実が認識されなければならない。デュルケームは、分業体系を「もの」として考察する対象にしたとき、分業に関与する人々の現実の諸関係が純粋に結合や協力の構造だけで成立つものとは決して考えなかった。自然

の状態において観察される分業体系のなかには、連帯を生みださないばかりか同時に分裂や闘争の契機を含むものがある。有機的連帯に基づく協働の結合形態といえども、そのなかには分裂や抗争の可能性が経験的に内包されるであろう事実に留意の必要がある。類似の観点がシェルスキーの「経営」概念[1]や、その他シェパートなどにみる産業社会学の研究[2]で明示されていることをわれわれは知ることであろう。「経営」は、結合と抗争の要素がそのなかに同時に含まれている分析的概念である。したがって、それの社会学的分析により結合と抗争という相反する過程をその緊張関係のなかで説明することが可能である。これは、結合構造と抗争構造を社会の二つの異なる別個のものとする考えの批判として提起されたものである。結合か抗争かという二者択一はもはやそこでは問題にならない。このような分析的観点は、協働の体系に関するホロヴィッツの論考において、その重要な意味あいが理論的に精緻にされている。ホロヴィッツは、協働の社会体系が常に合意の基礎であるという通常の考えを退け、それが同時に対立・抗争の契機を内包するものであり、その限り合意は協働体系の機能的欲求の充足にとって必要な条件であると考えた。そのことから、社会の合意モデルを支持することにより社会体系の統合の基礎を合意のなかにのみ求める見解は、合意の実現をさまたげる原因を協働体系のなかにさぐる努力をおこたることになるという批判にいたった。[3]

経験的に論証しうる分析的概念としてデュルケームが提示した分業体系は、それといわば表裏の関係にある所有体系から切り離してとらえる傾向が強いという批判点は大いに含まれながら、ホロヴィッツの協働体系の概念と同じく統合と抗争という相反する過程をそこから分析的にとり出すことの可能な概念として提示されたものと考えられる。デュルケームは、分業にあずかる「諸部分間の自発的合意」(le consensus spontané des parties) が分業を道徳的に規制するという、分業の正常状態を実現させるために要求される相当の条件を指摘した。そのさい彼は、道徳的合意成立の社会的必要条件を決定することに専念し、分裂を生み出している現実の諸条件については経験科学的な関心を余り向けなかった。まして抗争を研究の中心課題とみなすこともなかったであろう。しかし、彼は所与の社会の統合や安

定性の維持にのみかたくなな期待を寄せたのではなかったし、むしろ現実は統合と抗争の諸力の均衡を包むものであるという見解についての強力な推進者であったと思われる。その意味で彼は、経験科学としての社会学の発展にやはり志向するものであったといえるのである。

(1) H. Schelsky, Die Bedeutung des Klassenbegriffes für die Analyse unserer Gesellschaft, *Jahrbuch für Sozialwissenschaft*. Bd. 12, 1961, SS. 261—3.

(2) H. L. Sheppard, "Approaches to Conflict in American Industrial Sociology," *British Journal of Sociology*, Vol. 5, 1954, pp. 324—341.

(3) I. L. Horowitz, "Consensus, Conflict and Co-operation" in N. J. Demerath Ⅲ and R. A. Peterson, eds., *System, Change, and Conflict*, 1967, pp. 265—279.

(つ)

(筆者　京都大学文学部〔社会学〕助教授)

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

Functional Analysis in Durkheim's Work

By Hisao Naka

Emile Durkheim's version of functional analysis, coming out of positivism, has exerted considerable influence on contemporary functionalist schools in sociology and anthropology. Aiming to understand the basic nature of this influence, this article gives a critical description of the analysis developed by Durkheim in his works.

The argument herein is presented in four related steps. First, we undertake to analyse the various ways in which Durkheim used the word "function" (la fonction), being careful to avoid certain confusion with the large assembly of terms used indifferently and almost synonymously with "function". In so doing, we recognize an analytical distinction between function which the term "correspondence" implies and need (i.e., the necessary condition of existence) to which the function is related. Next, by examining his major works, we demonstrate that he uses the term function only when discussing some parts or aspects of a society and that his analysis of society is not exclusively concerned with unity. Third, we suggest that although he was primarily concerned with the world of the "social fact" and portrayed it as concrete in order to justify the stability that the term "fact" suggests, it remains true that he was entirely concerned with the essentially dynamic nature of society. So it is also noted that his concept of a society's need might more aptly be described as being the immanent consequences of its development. This is a reason

why his functional approach differs radically from modern functionalists in his preoccupation with society in process.

This paper finally consider his normative commitment to a particular way of functional approach. After the fashion of Merton, Durkheim's moral imperative permits the pouring of ideological content into the bottles of functionalism, even the bottles themselves are neutral to their contents. We recognize conclusively, however, that Durkheim's work has not been exclusively pursued from normative version. His work seems to have demonstrated the crux of functional analysis, capable of satisfactory empirical application.